

9/4 使徒の働き 9 章 36—42 節「多くの良いわざと施し」

小池 宏明 牧師

今回取り上げるのは、ドルカスという人物で、良い行いによって、救い主イエス・キリストを証しした女性だ。彼女が活躍したのは、エルサレムで教会会議が開かれる前のことで、イエス様の 12 弟子の一人シモン・ペテロが、エルサレム教会から派遣されて、各地で福音を伝えていた頃だ。

*キリストの弟子ドルカス

このドルカスは、「女の弟子」(36 節)と記されている。この言葉は、新約聖書の中で、ここだけに使われている。彼女は、イエス・キリストの「女の弟子」として広く認められていたのだ。彼女は、「多くの良いわざと施し」をした。ところが、彼女は病気のために召されてしまった。多くの人々が彼女のために悲しんだ。そして、近くまで来ていたペテロを呼んで、ドルカスの遺体の前で、涙を流した。主は憐れんで下さり、ペテロを用いて、ドルカスを蘇生して下さった。ドルカスは多くの良い行いをしたから蘇生したのではない。多くの人々が、主イエス・キリストを信じて、主の許に立ち返るために彼女は蘇生させられたのだ。主イエス・キリストの弟子ドルカスは、その信仰のゆえに、良い行いをして、困っている人々のために施しをして生活した。そして召された後も、主イエス様は彼女を生き返らせてまで、救い主イエス・キリストの証し人として用いて下さった。

*行いによっても

主イエス様の弟に当たるヤコブが書いた手紙の中で、信仰に基づく行いの大切さが説かれている。ヤコブ 2 章 14~17 節を読んでみよう。人は信じたように、行動を起こす者だ。救い主イエス・キリストのご愛を知り、主イエス様に信頼するなら、イエス様の似姿に創り変えられていくのだ。

当時の社会では、貧しい人々をかえりみる人は、ほとんどいなかった。しかし、クリスチャンたちは、キリストの自己犠牲の愛を見習って、人種や民族、性別などの隔てを造らずに、主イエス様を愛するように隣り人を愛する生活を送って、キリストの証し人として用いられた。使徒たちや、伝道者たちのように各地を旅しながら福音を伝えた信仰者たちはそれほど多くはなかったと思う。使徒の働きでは直接福音を語る使徒たちの姿が注目されているが、ほとんどのクリスチャンは、生活の場で、良き愛のわざを行って、隣り人に、自らがキリストの弟子であることを証しする生き方をしたのだ。改めて、私たちの生き様が問われる。私たちの生き方が、救い出された恵みを喜んで、口先だけではなく、行いによっても、主イエス様が示して下さった自己犠牲の愛を表しているだろうか？